

主の昇天 (マタイ 28:16-20)

主は御父の右にいて、わたしたちと共にいてくださる



主の昇天の祭日を迎えました。来週の聖霊降臨を迎えるまでが典礼暦は「復活節」です。すると、ご昇天、聖霊降臨、ともにイエスの復活との繋がりを意識して思い巡らすべきです。少しそのことを意識して考えてみました。

中田神父が助任司祭時代に堅信組を受け持たせてもらい、いよいよその子たちが堅信前の直前の試験を受けることになりまして、私は口頭試験の部分を受け持ちました。その中で、「イエス様の御生涯を、自分の言葉で説明する」という項目がありました。

「イエスは人としてはマリアから生まれ、30歳の時に十二人の弟子を集めて宣教活動に入り、ことばとしるしで神の国の福音を告げ知らせ、苦しみを受け、十字架上でお亡くなりになり、死んで三日目に復活し、天に昇って御父の右に留まり、約束の通り聖霊を送ってくださいました。」

これを、文字通りには言えなくとも、言える範囲で信仰表明してほしい。そう言う狙いがありました。筆記試験で不合格になりそうな生徒を救ってあげるためのものでもありました。口頭試験ですから当然緊張します。上がってしまって、しどろもどろになることもあります。どの子も何とか自分の覚えている範囲で言って、それを聞いている私たちが少し助けてあげて、口頭試験での点数を増やしてあげていました。

ある堅信組生徒が、「マリア様から生まれ、十二人の弟子を集めて・・・」とすらすら答え始めたのですが、「死んで三日目に復活し」のあとをど忘れしたのか言葉が出てこなくなりました。「復活してどうした?」「復活したんだから、この世の体にはもう縛られないよ。どうなったかな?」私の投げかけがさらに緊張させるのか、いよいよ黙ってしまいました。そこで緊張を解いてあげようと、次のヒントを出したのです。「ヒントをあげよう。『たっただたたた、たっただ。たっただたたた、たっただ。』神父様の歌で何か思い出さないか?」

我ながら、的確なヒントをあげたなあ后感心していたのです。ところがこの生徒、顔はほころびましたが答えには結び付きませんでした。私は歌を最後まで歌い上げました。それでもついに、「しょうてん」という言葉は出てきませんでした。「主の昇天」でも、落語の「笑点」でも、どちらでも点数を上げるつもりだったのですが残念でした。

まあとにかく、私たちは「主の昇天」をイエスの復活との繋がりの中で考える必要があります。イエスの復活は、「死者の中から復活した」そのことに目が向かいますが、昇天の出来事は、救い主がもはやこの世の体や、時間や、場所にとらわれないお姿で私たちを守ってくださる。そのことに目を向けるきっかけにしてほしいのです。

考えてみてください。私たちは主日のミサを決まった時間にささげています。朝6時とか朝9時とか、決まっていますね。その、決まった時間にミサをささげて、「この祭壇の上にイエス様がおられますよ」と

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

話した場合、もしこの世の体や時間や場所に縛られていたら、ほかの教会で全く同じ時間に主日のミサをささげているとき、そこには留まることができないわけです。中田神父も、三つの教会の主任神父ですから、井持浦にも浜脇にも、定期的に姿を見せたいなと思っています。ただ人間である中田神父は、同じ時間に別の場所に存在することはできないのです。毎週福江教会の主日ミサをささげたいですが、復活し、昇天したイエス様と同じようにはいかないのです。

天に昇られたイエス様は、この世のすべての制約から解かれて、自由にすべての時間と場所にいてくださり、私たちのために配慮してくださいます。ですから私たちは、主の昇天を心から喜びます。復活された主が、御父の右におられるから、日本中で主日のミサに同時におられ、世界中で主日のミサに同時にいてくださいます。中村大司教様のささげるミサにも、私のささげるミサにもいてくださいます。心から感謝します。

この喜びは、教会に来たときだけのものでしょうか？朗読された福音を読み返してください。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28・20) あなたがたはだれでしょうか？使徒たちだけの話でしょうか？もちろん私たちもです。

私たちが聖母月のロザリオを唱えるとき、朝晩の祈りをささげるとき、食前食後の祈りの時も、この世の一切の制約から解き放たれて御父の右におられるイエスが、いつもあなたがたと共にいるのです。だから、主の昇天を喜びましょう。「復活したイエス様は、今や、いつも私たちと共にいてくださいます！」この信仰を携えて、今週一週間に入りましょう。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 20:19-23)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。